○「新自讃歌評論」

三四の句、（雨の音にものおもひをれは）とは、うひ〳〵しきなり。春の雨は、しめやかにふるものなれは、（雨の音）とは、ふさはしからす。（雨の音に）とあるを（雨つゝみ）とすれは、聞えもすへきものをや。（二十二ウ）

これをみると、「新自讃歌評論」の胤平は「評論」を自ら思ひ合せてゐなかつたかもしれない。胤平は、さういふこだはらない自信をもつてゐたところがあつた。

「十四家集」の

17禁中梅　梅つぼのうめのさかりに成ぬらむ大宮人の袖かをるなり

は、作者は松波資之である。『新自讃歌』には作者が黒田清綱で

禁苑梅　梅壺の梅の盛になりぬらむ大内山の風かをるなり

がある。この資之の歌に対しては

○「評論」

二句うめやとして三句なりぬらしといはむかたまさるへくや（乾六オ）

○「評論弁」

もとのまゝにてよし梅つぼの梅といはんからには梅やとおほかたに疑はんよりものとたしかにさしたるかたまさりたらむ（十八ウ）

とある。清綱の歌には「新自讃歌評論」は

此歌も三句にて切たり、前にいへるか如し。趣向も亦をさなし、たゝことにて、いひふりたる姿ならすや。（十三ウ）

といつてゐる。『いひふりたる姿』としてゐるのだから、「十四家集」の資之の歌など記憶になくても不思議ではない。資之の『花仙堂歌集』にはこの一首があるが、清綱の『瀧園歌集』にはみえない。

かうした作が行はれてゐた三十一年に、子規の『歌よみに与ふる書』『百中十首』が同じ「日本」にのつてゐる。子規にしても鉄幹にしても、それほど旧派の歌を詳細にみてゐたわけではない。旧派から轉向してくる作者を期待するよりは、自説に同調する人々を待望してゐた。一方旧派は旧派で別の世界をもちつづけた。胤平たちの評論はどちらの側により多くひびいたであらうか。お互に、たとへそれで反省したとしても、さういふ弱みは口外するものではなかつた。

すむなり』を「評論」は

二句くみしらぬとあるは、優ならす、くみもしられぬなといふへき詞なるを、またといふことといはまほしくて、かくよめるにやくちをし（乾七ウ）

といつてゐるのに対して「評論弁」は

くみしる。くみしらぬなどはつねにいふ詞なるをいかで優ならずとは難じけむさてくみもしられぬといひてはも文字初句にさしあひてきゝよからず（二十三オ）

と反駁してゐる。豊頴はこの「評論」「評論弁」を見てゐただらうか、もともとものであつたのか、後にのをもにしたのだらうか。

批判論難をいちいち気にしてとりあげてゐたら作者の立場はなくなる、自作への評価は作者なりに各自がもつてゐた筈である。さうした例を黒川真頼にみることが出来る。

「日本」の明治三十一年二月七日の紙上に『新自讃歌（一）』で小出粲の歌がのり、二十五日の『（十四）』佐佐木信綱で一応終つてゐる。徒然坊は追記して、税所篤子（ママ）は宮中にゐて『書信不便』、鶴久子は『旧作のみ』であるからと辞退し、落合直文は『今日の是は必しも明日の是にあらざる故』、三田葆光は『夙に世の交を謝し』、海上胤平近藤芳介は『再度書を発して促したれと応せされは』皆省略したといつてゐる。

自讃歌をおくらなかつた胤平は「新自讃歌評論」（明治三六、三）を出してゐる。

この新自讃歌中に、真頼は「十四家集」の作を三首また入れてゐる。

13 春雪　たち出て見る心にもなりにけり風寒からて雪のふれゝは

30 閑居鶯　うくひすは人く〳〵と鳴なれと我柴の戸は明る音もせす

76 雨中蛙　桜ちる春のゆふへの雨の音に物思ひをれはかはつ鳴なり

76の論評を例にあげると

○「評論」

三句雨よせなし、蛙は鶯郭公なとのやうに、うちつけに鳴へきものならす、此歌ものおもひをれは、蛙鳴とあるは、俄に鳴出たるさまなり、かくてはいかゝあらむ、蛙は雨をまちて、空の曇りたらむ夕には、殊さらに鳴きほふものなれは、雨の音にぬしか、ものおもひせぬさきより、鳴たるなるへし、さなけれは、此蛙は、ほれたるにや、ありけむ（乾十九オウ）

○「評論弁」

よせのことは前にくはしう辨しおきたればいふにおよばず物思ひをれば蛙なくなりとあるを俄に鳴き出たるさまなりといへるはたがへりこは物思ひをれば蛙が鳴クワイといふことにて俄なるにもその前より鳴てあるにもかゝはりたることにはあらず古歌の例みなしかり挙るにたへずさて又蛙は鶯郭公などのやうにうちつけに鳴べきものならず雨を待ちて云云などくた〳〵しういとむづかしげにいへるは心得られず蛙は俄にも鳴いで又をやみもし長きあひだも短きほども定めなく朝にも夕にも月にも闇にも鳴くものなり空の曇りたらん時に雨を待ちて声きほふにかぎりたるものにはあらず（四十八ウ四十九オ）

ねかくしらへ高くあらはや（乾五十三オウ）

ここには胤平の師承系譜を示すものもある。326 406ともに訂正歌句で評論してゐる。これからすると、胤平は、210 326 406を訂正189を未訂正本によつてゐることがわかる。

これを前後にひろげて推測すると、一首も訂正のない本、五首以上の訂正本の存在も考へられることになる。

もともと当時はまだ活字印刷に誤植の多いことが公認されてゐた。「評論」そのものでいつても、189の題を『露上残月』と誤植してわきに『霧』をおしてゐる。末尾の五十五ウに『一此書難しもらせし廉々多けれは、後にあくへし』とか『一此十四歌家集にかきらす（略）』などの訂正がある。

「再評」はこの『もらせし』を難じて

（略）漏ハ漏ノ定辞ニテ漏テシトイフカ正格ナリ其シテヲ約メテ漏ナルニ直ニシ辞ハ属セス其セヲシニ轉シテ漏シヽトイフカ語例ナリ然ルヲ近世人ハ常ニ誤テ漏セシトイヘリ人ハ語格ヲ知ラヌト誇言シナカラ此誤用アルハ如何ニヤ

とあるのを見ると、清直は訂正のない「評論」によつてゐることになる。

かうした処から、誤植をなくした改版の計画があつた。

弾琴緒の桐園社の出した「再撰類題秋草集」（明治廿、五）に挿入の広告紙片をみると、「東京大家十四家集」と「石園集」の刊行企画がわかる。

『廉価豫約出版書報告』として、「十四家集」の作者をあげて『上美濃紙摺美本一冊普通定価金廿五銭』『豫約期限来月卅日限豫約正価金二十銭来月一日ヨリ送本ス外郵便税六銭』とある。飯田年平の「石園集」は明治十七年四月出てゐるが、『製本形大ニシテ懐中ニ便ナラス且価モ高価ナレバ』普通定価六拾五銭を豫約正価四拾銭で出すといふのである。「石園集」そのものの定価は記入がないので不明である。「十四家集」も同様定価がないが、少くとも豫約正価はそれらよりやすかつたのであらう。「十四家集」の場合、定価のみでなく誤植もその理由にあげて、

（略）或人之レヲ通常活版ヲ以テ印刷シ世ニ公ニセリ然レモ原書甚誤字多ク且ツ字体離々ニシテ読ミ難ク殊ニ麁製本ナレハ今回更ニ之ヲ訂正シ続キ仮名活版ヲ以テ頗ル印刷ヲ鮮明ナラシメ且冊子ヲ美麗ニ仕立テ出版セント欲ス希ハ同盟加入アランヿヲ

といつてゐる。これが『続キ仮名』の活字で出たものであらうか。私には眼福の機がなくて過ぎてゐる。

前掲四首の訂正で、三首が本居豊穎の歌である。これを豊穎の家集「あきの屋集」（明治三五、五）に対してみると、「十四家集」の豊穎の三十首のうちで、189『霧上残月』の一首はないが、他の二十九首はすべて「あきの屋集」にある。326『恋涙』は『いつこか波は』であり、406『隠士出山』は『啼て出る』で訂正歌句通りである。22『霞知春』の第四句は「十四家集」は『水の煙の』であるが「あきの屋集」は『水の煙も』である。これは後年の推敲であらうか、それとも「十四家集」ですでに訂正されるべきものであつたのだらうか。この『春そともまたくみしらぬ浅沢の水の煙のすゑか

難者ハ語格ヲ普ク通辨シタル人ナルベシ然ルニ其語格とカイフモノヽ内ニナキ格ナレハカ集中ニ違格ノ語一二ナラヌアリト雖モコレヲ辨駁スル丁ノナキハ不審ノ至ト謂フヘシ今其一二ヲ挙テ難者ニ可否ヲ質問セム馬上見花トイフ題ノ哥

長閑にも見つゝゆくへき花陰をいさめる駒に乗てけるかなトアル乗てけるかなとハイハレヌ辞ナリ故ニ東人之荷向筐乃荷之緒尓毛妹情尓乗尓家留香問トアレハ乗ニケルカナトイフヘキナリ乗西意車ニのりぬ舟にのりなむナトヽコソアレ乗テム乗ツ乗テムナトハイハレヌ辞ナルヲヤ

○「評論駁正」

手綱とることもわいため花はのとかにみまほしと思ふものから行ききのいそく事のあれは乗静めむこともかなはぬはあかぬことなりとみやひと雄々しき心を含めりとみるへし

右で未刊の「再評」は、佐佐木信綱録の「小鈴随筆」を明治二十二年六月赤堀信成が写したのを、二十三年三月柴田顕光が写したものにより、「評論駁正」は榲邨の自筆稿本によつた。

「評論弁」が春の部だけで続刊されなかつたために、八十八首ある春の部で、「評論」「評論弁」「再評」「駁正」の四書がとりあげてゐるのは、右の68『馬上見花』だけである。「評論」「評論弁」「再評」がとりあげてゐるのは、2と19の二首である。「評論」「評論弁」「駁正」がとりあげてゐるのは7、18、20、25、34、38、50、55、56、66、72である。

各論が所謂旧派内での評であつて、与謝野鉄幹や正岡子規の評とはちがつて、多く語法論と趣向論に終始してゐる。

「十四家集」は和綴ではあるが、活字印刷で誤植が多い。それに気づいて、右わきに活字をおした訂正本がある。この訂正本が何種類あるであらうか。私のみたのは二種である。

189 終夜ぬれにし月のしら露はさ霧なりけりしのゝめのそら（十七オ）
ちる
210 千代といふ事は白菊萬代のかめにさしてそ見るへかりける（十八オウ）
326 涙川いつこか波のたゝさらむ思ひのふちよ人のうき瀬よ（廿八ウ）
て出
406 啼そむる谷のうくひす大御代の春まつ程や寒けかりけむ（卅五ウ）

の四首訂正本がある。右の189の訂正のない三首訂正本もある。

胤平の「評論」は189を

終夜ぬれにし月のしら露とは、いかなる意にか月の白露といふものか、終夜ぬれにしやうに聞ゆるなり、若終夜月をぬらしたる白露と思ひしは、さ霧なりとの意ならむには、言葉たらはて紛らはし、かくてもとゝのひたりや（乾四十六ウ）

としてゐるから、未訂正本によつてゐる。それに対して、210は訂正の『ちるといふ』で

二句いひかけたるそのさまくるし、さていひかけたる詞はときにとりては、おもしろきものなり、そは鳴や霜夜のさむしろにまたこぬ人をまつほのうらなとのことし、しかしてわろくもてつけたるは口軽にいやしく、狂歌なとのやうにて、殊の外劣れるものなり、されはみたりにはいはさるものそ、おなしさまを諸平うしかよめる　簾もる夕日の影はしくれてもをかめの菊の香こそふりせ

148夏花　根を絶し浮藻も花はさく物を世にたゝよへる我や何なり
230山家初冬昨日たに木のはしくれししからきの外山の庵に冬は来にけり
287惜歳暮　新らしき年はまたても立ぬへしをしきは馴し今年なり鳧　黒川　真頼
76雨中蛙　桜ちる春のゆふへの雨の音に物思ひをれはかはつ鳴なり
251冬月　窓の戸をほそめに明て見つるかなあらしの庭の冬夜の月
380披書思昔見出たるむかしの人の玉つさに覚えすかゝるわか涙かな

――「我楽多籠」の誤りは「十四家集」によつて訂してある。これに続けて次の如くある。

右の内最高点三首は

天　二十八点　述懐　正風
地　二十七点　冬山路　祐命
人　二十六点　馬上見花　正風

であつたさうです。是れは明治十五年から十六年に掛る一箇年の歌に過ぎませんから、是れで明治の歌人を品評する訳には参りませんが（下略）

とあるので総点數の高点はわかるが、どう点數をもり、誰の互選結果であるかは不明である。

これらのこととは別に、「十四家集」に対する論評が出た。

海上胤平の「東京大家十四家集評論」が十七年十一月に出、それに反論した鈴木弘恭の「東京大家十四家集評論弁」が十八年十二月に出た。

この二書は刊行されたものであるが、未刊で、御巫清直の「東京大家十四家集評論再弁」（明治二二）があり、同じく「東京大家十四家集再評」（明治二三）がある。小杉榲邨の「東京大家十四家集評論駁正」（明治二四）がある。

刊行された二書は直接の論難があるが、未刊の方はお互の評論を見てゐないむきもある。その上、弘恭の「評論弁」は春の部であとがない。そこで互選結果で『天』は雑『地』は冬であるので、『人二十六点』の正風の『馬上見花』を例に、各論を並べてみる。

○「評論」

いさめる駒を乗しつめて、花の木かけは行へきを、かくいひては、心さわかしくて其さま手綱とるすへも、しらさるものゝやうに見ゆるなり、さてはくちをしからずや、木のもとにいさめる駒をひきとめてかへり見すれは花そ散くるかくいひては聞（ゆト訂）えましくや（乾十七ウ）

○「評論弁」

弁云此評論者は太刀かきのわざをほこらしげに序文にいへるが馬乗るわざにもまたすぐれたるらんいと雄々しかしされど此書には歌のよしあしをおきて馬のるわざの上手と下手とを論ぜんもよしなかるべければとかくいふにおよばず歌の心の優なるをばしる人ぞしるらんかし（四十五オウ）

○「再評」

○語格を辨へさるにや語格を辨ふへし語格をしらぬいひさまならすや語格もしらさるものなるへしナト評スルモノ五許アリサレハ

312 名立恋　音羽河おと高しとて中たえは絶たる名をも流すへきかな　池原　香穉

11 餘寒霜　山かけのあしたの庭の霜はしら立かへりても寒き春かな

253 山寒月　山のはの雪吹おろす夜あらしにさえなからこそ月は出けれ

364 鷺　河岸の並木の柳あるかきり鷺のゆくへの見えわたるかな　嵯峨　実愛

18 月前梅　さやかなる梅の匂ひにあくかれて朧月夜をふかしつる哉

108 待客聞郭公　諸ともに聞むといひし人よりも先に来て啼くほとゝきす哉

323 夏恋　かいまみし其夕顔の花ゆゑに垣ねにたゝぬたそかれそなき　本居　豊穎

72 落花随風恨めしき風の行へをいつこ迄はかなくしたふ桜なるらん

228 暮秋　影うすき秋の末野の夕つく日時雨てさへや暮むとすらむ

406 隠士出山　啼そむる谷のうくひす大御代の春まつ程や寒けかりけむ（て出ト訂正）　黒田　清綱

31 花間鶯　かさゝんと思ひし花も鶯の木伝ふ見れはをられさりけり

283 炉辺会友　埋火のもとによる〳〵円居して冬こそ友は親しかりけれ

333 寄橋恋　あふと見る夢の浮橋現にもかゝらはいかに嬉しからまし　松波　資之

104 月前郭公　子規まつに心のかたふきてふけゆく月をよそに見しかな

277 雪中松　白ゆきに隠れたるより顕れて見ゆるは松のみさを也けり

363 庭上鶴馴　大宮のみはしのもとに住鶴は千代の所を得たるなりけり　三田　葆光

163 夕草花　水そゝくゆふへより社またれけれ咲らむあすの朝顔の花

296 老後恋　老ぬれは人の情も身にしみていよ〳〵もろくなる涙かな

355 山家水　山深く住てこそしれ世の人にくまれぬ水は濁らさりけり　高崎　正風

68 馬上見花　長閑にも見つゝゆくへき花陰をいさめる駒に乗てける哉

408 述懐　言の葉のまことの種と成ぬへきをさな心はいつ失にけん

360 晴天鶴　青雲のかきりも見えぬ大そらに翅をのへてたつ啼わたる　伊東　祐命

203 月前擣衣　月影に見ゆるかきりは家もなしいつこ成らむ衣うつこゑ

284 冬山路　足ひきの山路の霜をふむ駒のいふきも白き朝ほらけかな

85 松高白鶴眠　といふ題にて春の歌よめと人のいひ侍りけれは山まつの枝をならさぬ春風は鶴の夢にもさはらさるらむ　小出　粲

28 暁鶯　月影は消なむとする花の上に匂ひ出たるうくひすのこゑ

348 夜道　行まゝにまた物影に成にけり嬉しく見えし里のともし火

418 寄千鳥祝　波風の静なる世はさきもりも千鳥にのみや夢さますらむ　山本　実政

121 樹陰蛍　蛍ちる光に見れはふく風をいとひし花の木かけなりけり

187 月前露　草の上の露を哀とみしほとに袖にも月のやとりけるかな

286 歳暮　おこたりの塵のみつみて文車の早くもめくる年のくれ哉　鈴木　重嶺

	実	実	美	清	正	豊	重	冬	葆	真	香	祐	粲	資
	愛	政	静	綱	風	穎	嶺	道	光	頼	稗	命		之
春	6	6	7	10	6	6	6	5	5	7	5	4	8	7
夏	6	6	2	5	3	5	5	5	5	5	5	3	2	5
秋	6	6	3	5	6	6	5	6	5	5	5	11	4	6
冬	6	6	2	4	3	4	5	3	5	5	3	4	7	4
恋	3	3	0	2	3	4	5	5	5	5	5	5	4	1
雑	3	3	16	4	9	5	5	5	5	5	6	6	6	7

この數字からも、各歌人の性格や歌風がうかがひ得る。三十首といはれて、きちんと五首宛にする歌人と、それを無視する歌人とあつて、自撰する場合にその歌風をどれだけ主にするかである。

宮内卿からの指示は明治十五年一月以降の三十首であつた。それがどれだけまもられたかであるが、通常はその指示に従つたものととられるのであるが、例外とおぼしきものが正風にある。

惜春　さくら花散し梢をまもるまに春もむなしく成にけるかな

は、北里闌の「高崎正風先生伝記」（昭和三四）をみると、明治十四年と十五年に重出してゐる。この伝記は本文がA5七六四頁に達する詳細なものであつて、この一首を十四年詠出十五年重出とみてもよいであらう、とすれば宮内卿指示より一年以前の作となる。

前掲の『附言』や葆光宛の宮内卿書簡によつて、甲乙丙に各自がわけて答へたことはわかるが、その結果は公表されなかつた。

甲乙丙にわけただけでなく、点數にもして合計されたらしいことが、高橋帚庵の「我楽多籠」（大正三）にみえる。この資料の出処は、親しかつた小出粲からではなからうか。

明治十六年三月徳大寺待従長は、御内意を受けて当時の歌人十四人に命じ、去年一月以来詠み出でたる得意の歌三十首づゝを、短冊に認めて差出させた事がありまして、其三十首を、無名投票で甲乙丙に分つて、一首十点を最高点とし夫々点數を入札せしめられた処が、其時の結果では高崎正風翁が最高点で、次が伊東祐命、其次が小出翁であつたさうです、今其全部を茲に掲載するのは餘り冗長になりますから、一人に付き最高点の歌三首づゝを掲載して御一覧に供しませう。

として示してゐるが、ここでは便宜原拠の「東京大家十四家集」によつて、その方の文字づかひで示してゆく。「我楽多籠」は漢字の使用度もちがつてゐる。歌人の順序は「我楽多籠」に従つておく。歌頭の數字は、「十四家集」の歌番である。

福羽　美静

412人の高年をことほきける日松有喜色といふ題にてよみ侍りける

松か枝も千年の友を得たりとて嬉しき色をきみに見すらん

388ある雅楽する人の歌乞けるにつかはしける

うたふ歌しらふる琴の高音より心の月はすみのほりけり

341雲　定めなき物と定めて見わたせは雲も心にたかはさりけり

間島　冬道

80水辺藤　河上の岩まのわかゆくみにきて今年そみつる藤なみの花

42霜　朝な〳〵けぬか上にはおかねとも深く成ゆく霜の色かな

くられけるをいかなることにかとひらき見れは

春寒料峭之処愈御安康令拝賀候扨て唐突之至ニ候へ共別封短冊差出候ニ付昨年一月以来之高詠中尤御得意之分四季恋雑之内三十葉御染筆令懇望此段以寸楮得御意候也　三月十三日

宮内卿徳大寺実則　三田葆光殿

となんありける思ひもよらぬ事なるにまして得意之なとあるにむねつふれていかゝはせまし「ひとつたにとゝのひかぬることの葉を三そちはいかてきこえあくへきなとも聞ゆへうもやおほえてしはしたゆたひてありしほとにほのかにもり聞ゆるはこたひうち〳〵の仰ことにて十人あまりの人々をえらはせ給ておなしさまに哥めしけるなりとそさてはおのれのみいなみまゐらせむもなか〳〵になめしきわさならましをとて近きころよみ出けるえせ哥ともはちかゝやかしなからかきてまゐらせたりけりさて五月はかりにまた宮内卿より

過日御差出相成候三十首哥供　乙覧候処自詠を除キ匿名ニ致し各自之見込を以中に宜しと思ふを撰抜し其中より甲乙丙の三等を定め候様との

御内命ニ付別冊差廻シ候間左之雛形之通点を加へ

○　甲

●　乙

丙

但シ評語あらは附箋ニすへし

猶巻末ニ点数相記し御差出有之度候事

甲　何首

乙　何首

丙　何首

年　月　日　何某評　印

右撰抜之上封書を以六月十五日限直ニ拙者江向ケ御差出有之度候也

五月廿四日　宮内卿徳大寺実則

三田葆光殿

とそありけるこれもまたおほけなきわさなからかにかくにいなみもあへすておろかなる心のひくまゝにつましるしつけてまゐらせけるはいかにひかことのみおほかりけむといとゝあせあゆるこゝちになんさてもこたひの哥人の中には或はつかさ位高き人あるは今の世にゆるされたる人たちもうちましりたれはかつは後の学ひのためかつは年月たちてのおもひ出にとてうつしおけるそ此一巻にはありけるさて宮内卿よりかの短尺かきてまゐらせしむくいにとて人々とおなしく白絹といへる絹ひとひら賜はりたるはいとかたしけなき身のめいほくにこそ（六の廿三ウ―廿五オ）

以上で、集歌と撰歌の指定月日ははつきりする。『位高き』最高は実愛の正二位であつて、年齢は正風の四十八歳、豊頴祐命の五十歳が年下の方で、重嶺の七十歳が年長である。

歌は四季恋雑で定数指示でないから、まちまちである。

「東京大家十四家集」周辺

熊谷武至

「東京大家十四家集」を解説して「和歌文学大辞典」には、

歌集。平井言満編。明治一六1883刊。明治初期の代表歌人一四人として嵯峨実愛・山本実政・福羽美静・黒田清綱・高崎正風・本居豊頴・鈴木重嶺・間島冬道・三田葆光・黒川真頼・池原香穑・伊東祐命・小出粲・松波資之の国学者系統・桂園派系統の旧派歌人の歌を集めたもの。このほかに民間歌人として星野千之・海上胤平・中島歌子などの歌も添えてある。胤平は『東京大家十四家集評論』を刊行、桂園派・堂上派を形式的な万葉主義から論難したが、これに対して鈴木弘恭は『東京大家十四家集評論弁』明治一八によって胤平の評論に反駁した。（片桐）

とある。まづ、この編者名平井言満は誤りで、元満である。この項の執筆は片桐顕智であるが、「明治短歌史論」（昭和一四、人文書院）で既に言満に誤つてゐて、以来改められてゐない。また、民間歌人の千之・胤平・歌子などの『歌も添えてある』とあるが、さういふ明治十六年の刊本は私の見聞にはない。『など』といつてゐる右以外の歌人を「明治短歌史論」では渡忠秋・伊能頴則・橘登世子・力石重遠・飯田年平・猿渡容盛とあげてゐるが、もしさういふ明治十六年の刊本があるとしたら、それは異版本であつて、あれば古書肆は万の単位をつけるであらうが、普通はさういふ附載はなく十四家の歌だけである。「明治短歌史論」は誤謬や誤植を多くもつものであるが、この場合も何かの混乱があつたものであらう。

「東京大家十四家集」には巻首に『附言』があつて、その由来を示してゐる。

此歌集は徳大寺宮内卿より現今の歌人十四名に去年の一月より此方よみ出たる得意の歌三十首つゝ書てよと所望有しにより各短冊に書てまゐらせたる歌なりそを宮内卿より
天覧に備へ奉られけるをよみ人の名を匿しておの〳〵よろしと思はん歌甲乙丙三等に撰ひて奉らせよとうち〳〵おほせことありて其ことくえらひ宮内卿へ出されしよし伝へ聞侍れと其撰ひのほとはいまたおほやけに聞えされは歌計をよみ人の名を書加へ写したるなり作者の姓名左にしるす

とある。十四家のうちに入れられた三田葆光は、「櫨紅葉」（明治四五）でもう少し詳細に伝へてゐる。

明治十六年やよひはかりゆくりなくも徳大寺宮内卿より消息お